

「世界の中の辻村先生」

坂 本 恵

今でこそ毎日のように外国からの留学生を相手にしているが、私が初めて留学生と同じ部屋で授業を受けたのは、辻村先生の演習のときであった。大学院に入学した年であったが、そのイギリスからの留学生が英語でノートをとっているのが印象的だった。その後も、次の年に開設された現代日本語コースの留学生の人たちと一緒に授業を受けたものである。その中でも、韓国、台湾、その当時は少なかった中国大陆からの留学生たちと一緒に受けた日本語の敬語を考える演習では、先生は敬語の問題について台湾ではどうですか、韓国では、中国ではと一人一人の学生にお聞きになっていた。本当に勉強になり、いろいろ考えさせられ、そして楽しい授業であった。

すでに帰国した元留学生の人たちの消息も先生から伺うことが多い。先生が入院されたとき、韓国から飛んできた人たちと病室で顔を合わせたこともあった。昔の仲間と言ってもなかなか顔を合わせる機会もなく、先生に仲介役をさせていただいているような気がしたものがある。

いつか演習の時に、私たちに「外国に行く気がありますか」とお尋ねになり、私は中国語をかじっていたこともあって、「中国語圏でしたら」とお答えしたことを思い出す。外国に行くことを本気で考え出したのはその時からのようだ。その後それが実現し、中国の大連、北京などに行くことになったが、その時先生は中国に行く時には、カーディガンなどの実用的なものを下さった。それらは現地に行つてからほんとうに役に立ち、重宝したもので、そこまで考えてくださるお心遣いに感激した。また、アメリカに行った時には知り合いの先生や、昔の教え子の方を紹介して下さったりもした。その後先生が在外研究員として世界中を回られたときの写真を拝見して、私が外国

で感じたようなことを、先生はすでによくご存じでいらつしやつたのだなと思い、それらのことも納得がいったわけである。先生の留学生に対する思いやりも、そのようなご経験からであろうか。研究室にいらつしやるときにはよくわからなかつた「世界の中の先生」の姿を外国に行くようになって初めて知つたような気がする。私はこれまで、あちこち歩き回つたりと、勝手なことばかりしてきて先生に申し訳ない気持ちでいた。しかし、今になって考えてみると、不肖の弟子であることにはかわりはないが、先生には「視野を広げよう、広く世界を見よう」というようなお気持ちもあつたのではないか、それならばこんな私でも許していただけるかもしれないと虫のいいことを考えているのである。